神戸新聞 自昭和30年1月13日 至昭和 年 月 日

続 ごぶさた 東京財界から ④

三井船舶社長
一井保造氏

◇…丹波篠山の出身とあるが山ザルどころか、洗練された社交ぶりは海運界でも定評があるそれもそのはず「実は神戸海岸通りの生れ、篠山の藩士一井家へ養子に行っただけのこと。その関係で旧藩主青山元子爵の尚志館（東京）に出入りし、本郷本庄（いずれも元陸軍大将）という篠山出の名士と知遇のある程度で、土地のことはトンと知らん」そうだ。神戸にはかれこれ三十七年住んだというから純粋の神戸ッ子である。神戸高商から東京商大に学び、中山伊知郎氏（一ツ橋大学長）と肩を並べて上田貞次郎博士の研究室に顔を出していたが、根がシャバっ気の強いのに加えて「大がかりな築港工事、その向うにひろがる青い海、人力車にふんぞり返った異人さん……」幼い胸に焼きついたこれら開港兵庫のエキゾチックな風物詩が、地味な学者コースを断念させ、海運界入りする動機となったものらしい。「兼松にいったん入ったが同時に三井物産の方も話がまとまって――」寄らば大樹の陰――無理もない選択。

◇―「シアトル時代に知り合った日本通の米実業家ワグナー氏が"日本で一番よい町は神戸、ついで博多"と口が酸っぱくなるほどいっていたが、国際都市として、アカ抜けのした、しかもあの落着きは恐らく世界一じゃないかネ。元町など舗装されていないところから何千回と歩いてみたが、今でも三日に一度は神戸の空気を吸いに出かけるよ」"いい町、いいところ"を連発するが、さて具体的にと開き直ると「そうだネ、イカリ山、修法ヶ原……いいネ」どうも漫然としている。万事この調子ではなかろうが、ボウヨウとした一面、そして憎めないところが氏の特徴でもある。日本貿易の開祖といわれる兼松房次郎氏（兼松の創立者）と組んで仕事した生糸商「伊藤商店」の三男という、恵まれた環境に育ったせいだろうか。

◇―三井船舶は今や欧州航路において日本海運の宿敵といわれる英国海運を間うに回してシノギを削っている。"英国海運と提携しているとは違いないが背後から郵船、商船（ともに欧州航路加盟会社）に内マタをかけられて最近は三井も大分へこたれてきたようだ。いよいよ今年がヤマだネ"と新年早々世間のうわさはあまり芳しくないが「同盟が三井の実力のほどを認めるまでは、断固配船は続けていくよ」意気なかなか盛んである。

終点といわれた神戸支店長から先輩の追放で三段跳びの幸運をつかみ、そのせいか、これまで自重主義で消極的うらみがあったが、この意気込みなら今年の財界ホープにのし上っても来よう。（隆）

現住地（東京都世田谷区北沢二ノ二五四）＝写真は一井氏

漫然たる落着き
職業転換させた異国情緒